000002

長崎。

木下李太郎

長崎は明治四十年であつたか、君等と一緒に歩いたときに一番好い印象を受けた。実際わかいときのものは不思議なものだね。その後二度行つたが、初めほどのことは無かつた。

僕は大正十年にクウバのハバナへ行つた時、長崎で受けたあの印象とやや共通な氣分を感じた。それで常に強民的エキゾチスムには(古代の)強民的とつよ

氣分

副性質があつたのだらうの古代とは十五六世紀のことだが、西班牙のコルドバやセビイヤ、伊太利亞のエルチアなどにも長崎情調と似たものがあつたようで、その印象の一致する。

迫若氏が言ふのは、クウバのハバナ

M. OTA.

000003

の方が、そのやや暗くなった本国よりも僕達一行に与る異国的な感じふれた、それは白壁に日の照りかえすところや、椰子、棕櫚などの枝ぬけの印象を来て居ることと思ふが、また熱帯地方に特有な気候のような、バルコンの設けひろ来る美観も本国ならうと思ふ。

僕は残念ながらまだ和蘭陀に到

ないが、長崎のエキゾチスムは全く拉丁民族的一西班牙葡萄牙的の要素もあるからと思ふ。

以上は主郎の白の[illegible]を落ちついての記録である。

現在はどうであるかしらないが、長崎は、市街も人も成る能く整頓の[illegible]の面、雅趣の有ったことは確かだった。私は若きよりさうして趣味には鋭敏であった

M. OTA.

(2)

が、一層好感を得たのであらう。
人々としては成瀬老刀自、上野屋の老主人などが、人々を記憶に存して居る。

長崎の事はもうはつきりと忘れてゐるが、今年の春は、岡山の帰りに、宮島津といふ港を通り、海に廻つて、かの京都、奈良を

古地的衰滅とは、
やつぱり。
のことで、巡査の交番所まで、根岸富士外まは、近代的のところのない、村だ。
流れこ
うに深く海水の入つた江の両側には、苔まるだらけの岩が立つて重なる。
るつ、大工がコあある。又山桜のあ
その昔、ワリニヤニエリヨ、天王を
などとも伝

(3)

MOTA.

000005

時のことを想像すると大きなく面白い。

僕は帰来「室津考」を書くつもりだったが、陣はなし、本は無しいし、到頭解散してしまった。それでもいつまでやるつもりで居る。

○

御尋ねの発句、この一年まるで

なし。殘念ながら発句することが出来ない。

去年西宮辺の道中と一座した句まで出来てあるのつづきのなかった歌仙があるが、即座詠みこと に書きにくいもの。

椋鳥の雨はや夏に入る風情哉

滝の舟瞬をつる宵

ちりちりと鳴る鳥の籠つゝ蓬

[illegible]

七月二日夜　相生にて

吉井君兄　侍史

（新長谷寺集の一）

(4)